

出品作品リスト

出品№	作品名	産地等	国名・世紀	品質	寸法(cm)	コレクション
1	黒陶線刻文広口壺	バン・チェン	タイ 紀元前3600-前1000年頃	土器	高17.0	本多コレクション
2	彩陶渦文鉢	バン・ブラサート	タイ 紀元前300-後200年頃	土器	胴径12.2	本多コレクション
3	彩陶渦文広口壺	バン・タマサート	タイ 紀元前300-後200年頃	土器	口径15.0	本多コレクション
4	彩陶磨製広口壺	バン・タマサート	タイ 紀元前300-後200年頃	土器	胴径19.7	本多コレクション
5	仏説法 2点		タイ 7-8世紀	粘土焼成(埴仏)	高12.7・13.5	川村コレクション
6	「舎衛城の神変(マンゴー樹の神変)」		タイ 9-10世紀	粘土焼成(埴仏)	高13.5	川村コレクション
7	55軀の仏陀坐像		タイ 14-15世紀	粘土焼成(埴仏)	高14.5	川村コレクション
8	55軀の仏陀坐像 型		タイ 14-15世紀	粘土焼成(埴仏型)	高12.7	川村コレクション
9	42軀の仏陀坐像		タイ 14-15世紀	粘土焼成(埴仏)	径9.0	川村コレクション
10	9軀の仏陀坐像		タイ 15-17世紀	粘土焼成(埴仏)	径6.9	川村コレクション
11	触地印仏陀坐像		タイ 15-17世紀	粘土焼成(埴仏)	高13.5	川村コレクション
12	触地印仏陀坐像		タイ 17-18世紀	粘土焼成(埴仏)	高7.5	川村コレクション
13	仏陀涅槃像		タイ 17-18世紀	粘土焼成(埴仏)	幅7.6	川村コレクション
14	触地印仏陀坐像 5点		タイ 17-18世紀	粘土焼成 銀板貼り	高7.3・9.8	川村コレクション
15	触地印仏陀坐像		タイ 17-18世紀	青銅鑄造	総高81.3	森田コレクション
16	播座三脚壺		タイ 7-9世紀	土器	胴径29.5	一般古美術資料
17	印花象文壺	スパンブリ	タイ 14世紀	陶器	高40.5	本多コレクション
18	鉄絵天人像装飾瓦	スコータイ窯	タイ 14-15世紀	陶器	高41.0	本多コレクション
19	鉄絵ノラシガ欄干装飾	スコータイ窯	タイ 14-15世紀	陶器	高41.5	本多コレクション
20	鉄絵魚文盤	スコータイ窯	タイ 14-15世紀	陶器	口径28.5	本多コレクション
21	鉄絵魚文壺	スコータイ窯	タイ 14-15世紀	陶器	高15.9	本多コレクション
22	鉄絵宝輪文鉢	スコータイ窯	タイ 14-15世紀	陶器	口径21.2	本多コレクション
23	鉄絵魚文台鉢	シーサッチャナーライ窯	タイ 15世紀	陶器	口径25.7	本多コレクション
24	鉄絵唐草文合子	シーサッチャナーライ窯	タイ 15世紀	陶器	胴径18.8	本多コレクション
25	鉄絵兎形水注	シーサッチャナーライ窯	タイ 15世紀	陶器	長13.0	本多コレクション
26	青磁鉄絵魚鳥文盤	シーサッチャナーライ窯	タイ 14-15世紀	磁器	口径29.3	本多コレクション
27	青磁刻花文菱花盤	シーサッチャナーライ窯	タイ 15世紀	磁器	口径25.8	本多コレクション
28	青磁刻花蓮華文壺	シーサッチャナーライ窯	タイ 15世紀	磁器	高18.0	本多コレクション
29	青磁刻花蓮華唐草文鉢	シーサッチャナーライ窯	タイ 15世紀	磁器	口径21.6	本多コレクション
30	青磁迦陵頻伽形水注	シーサッチャナーライ窯	タイ 15世紀	陶器	高20.5	本多コレクション
31	白釉釉刻花龍鳳鳳文水注	シーサッチャナーライ窯	タイ 15世紀	陶器	高27.4	本多コレクション
32	白釉釉象置物	シーサッチャナーライ窯	タイ 15世紀	陶器	高19.8	本多コレクション
33	練上手水注(ケンディ)	シーサッチャナーライ窯	タイ 14-15世紀	土器	胴径14.3	本多コレクション
34	印花白象嵌喫露文長頸瓶	ランブーン	タイ 14-16世紀	土器	高18.5	本多コレクション
35	鉄絵双魚文盤	サンカンベン窯	タイ 15-16世紀	陶器	口径25.8	本多コレクション
36	鉄絵飛鳥文盤	カロン窯	タイ 14-16世紀	陶器	口径19.4	財津永次氏寄贈
37	青磁刻花文盤	バーン窯	タイ 14-15世紀	陶器	口径26.3	本多コレクション
38	弥勒菩薩像頭部	カンボジア	10世紀	青銅鑄造	高13.0	一般古美術資料
39	女神立像	カンボジア	12世紀	青銅鑄造	高21.5	川村コレクション
40	仏三尊像 型	カンボジア	12-13世紀	青銅鑄造	高17.0	川村コレクション
41	仏三尊像 型	カンボジア	12-13世紀	青銅鑄造	高9.2	川村コレクション
42	ヘーヴァジュラ曼荼羅 型	カンボジア	11-13世紀	青銅鑄造	高16.5	川村コレクション

・展示順序とは必ずしも一致しません。
・都合により展示作品を変更することがあります。

出品№	作品名	産地等	国名・世紀	品質	寸法(cm)	コレクション
43	ヘーヴァジュラ法螺貝形法具		カンボジア 11-13世紀	青銅鑄造	高25.2	本多コレクション
44	灰釉盤口小壺		カンボジア 10-11世紀	陶器	胴径8.9	本多コレクション
45	灰釉双魚形合子		カンボジア 10-11世紀	陶器	長9.1	一般古美術資料
46	灰釉鳥形小壺		カンボジアまたはタイ 11-12世紀	陶器	胴径11.4	本多コレクション
47	黒褐釉鳥形小壺		カンボジアまたはタイ 12-13世紀	陶器	胴径9.0	本多コレクション
48	黒褐釉象形壺		カンボジアまたはタイ 12-13世紀	陶器	長15.5	本多コレクション
49	黒褐釉象形小壺		カンボジアまたはタイ 12-13世紀	陶器	胴径10.2	本多コレクション
50	灰釉象形小壺		カンボジアまたはタイ 11-12世紀	陶器	胴径9.5	本多コレクション
51	黒褐釉兎形小壺		カンボジアまたはタイ 12-13世紀	陶器	胴径9.7	本多コレクション
52	灰釉兎形小壺 2点		カンボジアまたはタイ 11-12世紀	陶器	胴径9.7・10.3	本多コレクション
53	黒褐釉蝶喰形壺		カンボジアまたはタイ 12-13世紀	陶器	胴径12.5	本多コレクション
54	黒褐釉人面文瓶		カンボジアまたはタイ 11-12世紀	陶器	高29.2	本多コレクション
55	黒褐釉盤口長頸瓶		カンボジアまたはタイ 12-13世紀	陶器	高23.3	本多コレクション
56	黒褐釉筒形合子		カンボジアまたはタイ 12-13世紀	陶器	高22.8	一般古美術資料
57	黒褐釉盤口瓶		カンボジアまたはタイ 12-13世紀	陶器	高33.7	一般古美術資料
58	黒褐釉飾目文大壺		カンボジアまたはタイ 12-13世紀	陶器	高56.6	一般古美術資料
59	黒褐釉飾目文大壺		カンボジアまたはタイ 12-13世紀	陶器	高59.7	一般古美術資料
60	三界経図緯緋壁掛		カンボジア 19-20世紀	絹	91×145	一般古美術資料
61	ヴェッサンタラ太子物語図緯緋壁掛		カンボジア 19-20世紀	絹	313×84	一般古美術資料
62	アプサラ(天使)行列文緯緋壁掛		カンボジア 19-20世紀	絹	89×250	一般古美術資料
63	転法輪印仏陀坐像 6点	ミャンマー	7-9世紀	粘土焼成(埴仏)	高9.0-10.5	川村コレクション
64	触地印仏陀坐像 5点	ミャンマー	8-10世紀	粘土焼成(埴仏)	径3.4-5.0	川村コレクション
65	触地印仏陀坐像 3点	ミャンマー	11-13世紀	粘土焼成(埴仏)	高9.5-9.7	川村コレクション
66	触地印仏陀坐像 3点	ミャンマー	11-12世紀	粘土焼成(埴仏)	高16.8-17.3	川村コレクション他
67	「双神変」の仏陀像 3点	ミャンマー	11-12世紀	粘土焼成(埴仏)	高18.8-19.4	川村コレクション他
68	触地印仏陀坐像と仏伝七相	ミャンマー	11-12世紀	粘土焼成(埴仏)	高16.3	川村コレクション
69	50軀の仏陀坐像	ミャンマー	11-13世紀	粘土焼成(埴仏)	高16.0	川村コレクション
70	触地印仏陀坐像	ミャンマー	16-17世紀	青銅鑄造	高22.0	川村コレクション
71	白釉緑彩獣頭人物像磚	ミャンマー	15-16世紀	陶板	高42.3	川村コレクション
72	白釉緑彩花鳥文盤	ミャンマー	15-16世紀	陶器	口径30.5	本多コレクション
73	白釉緑彩花文盤	ミャンマー	15-16世紀	陶器	口径29.0	本多コレクション
74	白釉緑彩仏塔文鉢	ミャンマー	15-16世紀	陶器	口径17.6	本多コレクション
75	白釉緑彩刻花文鉢	ミャンマー	15-16世紀	陶器	口径17.5	本多コレクション
76	緑釉盤	ミャンマー	15-16世紀	陶器	口径29.5	本多コレクション
77	白釉刻花文陵花盤	ミャンマー	15-16世紀	陶器	口径30.2	本多コレクション
78	青磁刻花文盤	ミャンマー	15-16世紀	陶器	口径29.3	本多コレクション
79	菊霽牡丹唐草文壺	ミャンマー	19-20世紀	捲胎漆塗	高さ12.3	本多コレクション
80	黒菊霽象嵌花文合子	ミャンマー	19-20世紀	藍胎漆塗	径11.3	本多コレクション
81	菊霽城郭文合子	ミャンマー	19-20世紀	捲胎漆塗	径13.6	本多コレクション

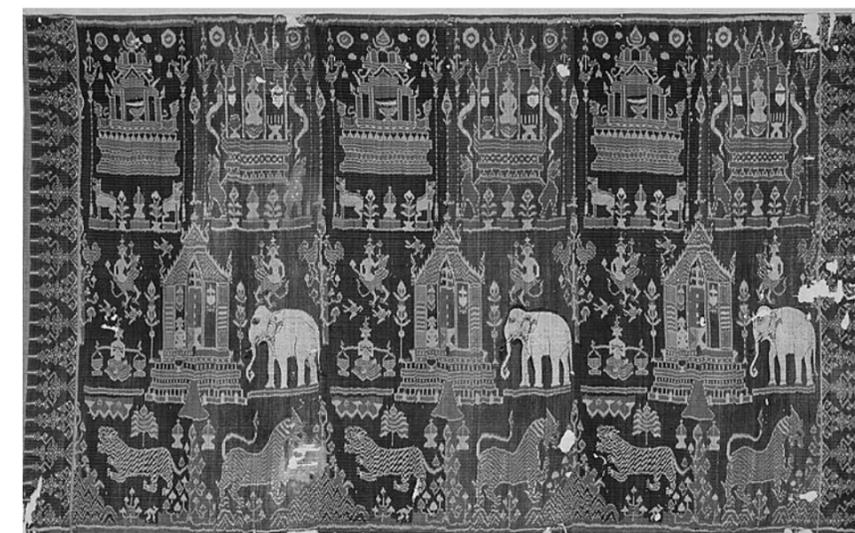


〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051 (代表) FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

東南アジア美術を旅する タイ、カンボジア、ミャンマー

会期 2023年2月21日|火|-4月9日|日|

会場 古美術企画展示室



No60 三界経図緯緋壁掛

東南アジアは地理的に「大陸部」と「島嶼部」に分けられます。「大陸部」はインドシナ半島地域をさし、「島嶼部」はその南端に位置するマレー半島と、インドネシア諸島、フィリピン諸島を含めた広大な地域をさします。

この広範囲において古来紡がれてきた歴史は実に複雑で、それに比例して多種多様な造形美が育まれてきました。本展では「大陸部」における現在のタイ、カンボジア、ミャンマーの領域で生まれた美術に着目します。民族や宗教を異にする大小様々な国家が国境を接して入り乱れるように興亡した半島地域において、これらの領域では、仏教やヒンドゥー教を信仰した強大な王朝が君臨し、それぞれに特徴的な宗教美術や工芸品を造形してきました。タイ族によるスコータイ王朝・アユタヤ王朝、クメール族によるアンコール王朝、ビルマ族によるバガン王朝などはその代表です。

福岡市美術館には一括寄贈コレクションを核として、東南アジア各地の多彩な古美術品が収蔵されています。本展では本多コレクションの古陶磁と川村コレクションの仏教美術を中心に3国の各領域を特徴づける作品81件(98点)を選び出し、にぎやかに展覧いたします。

[学芸員 後藤 恒]

I タイ

I-1：先史時代の土器

タイ東北部ウドン・ターニー県のパンチェンにある先史時代の集落遺跡から出土する土器は、熱ルミネッセンス法による年代測定法によって最古のもので紀元前3600年頃にまで遡る可能性が提示され、時代区分も前期（紀元前3600年頃～前1000年頃）、中期（前1000年～前300年）、後期（前300年～後200）とする見方が一般的です。**出品No.1**は、黒色の器面に力強い文様を陰刻した前期の遺物の一例です。この時代区分は未だ定説をみませんが、インドシナ半島には太古より高度な生活文化が育まれていたことを物語っています。タイ東北部には他にもバンブラサート、パンタマサートなどパンチェン同様の集落遺跡が知られ、中・後期に相当する洗練された彩色土器（**2～4**）が出土しています。

I-2：ほうけんぶつ 奉獻仏

タイの街を歩くと、「プラ・クルアン (Phra Kreung)」という小さな護符をネックレスとして身につけたり、車内のバックミラーに吊るすなどして携行する人をよく目にします。これはタイ語で「聖なる護符」を意味し、仏像の他、歴史上の神格化された王や高僧の肖像などを型押しで浮彫状に表したもので、携行することで積徳や厄除けなど様々な功德があるとされています。

古来、仏教が篤く信仰されてきたタイでは、型押しで成形した小型の仏像が、時代や地域によって造形的特徴を異にしながら大量に作り続けられてきました。多くは粘土焼成によるもの（塼仏）で、仏教の繁栄や永続などを祈願して仏塔や寺院に奉納する、いわゆる奉獻仏として作られたとみられ、各地の寺院遺跡から多くの出土例があります。いつからかそれを念持仏として崇めたり携行することが流行し、様々な民間信仰とも結びつき、今のプラ・クルアンの風習に繋がったものと考えられます。

5・6はモン族による仏教国家ドヴァーラヴァティー国の時代の遺物です。**5**は、椅子に座る中央の仏陀釈尊の足元に輪宝を挟んで向い合う二頭の鹿のよ

うな動物が見えることで、釈尊がサールナートで初めて説法を行った、いわゆる「初転法輪」の場面と捉えることが出来ます。**6**は、中央の釈尊の台座（蓮華座）の左右から上に伸びる蔓状の植物、頭光と同心円状に樹木の実と葉らしきものが描かれる事などから、釈尊がシュラーヴァスティー（舎衛城）で起こした数々の奇跡の一つで、マンゴー樹を瞬く間に生長させるという奇跡の場面を表したものとされます。このように釈尊の偉大さを伝える場面が小画面に凝縮して造形されています。

タイ族による最初の統一王朝・スコータイ王朝（13～15世紀）の時代より上座部仏教が根付くと、彫刻として造形化される尊像もっぱら仏陀釈尊で、特に右手の指先を地面に向けた「触地印（降魔印とも）」のポーズをとる坐像が大半となります。これは釈尊が菩提樹の下で悟りを開いた時、それを妨害する魔衆を退散させた時の姿を表しています。**7～15**は、スコータイ王朝と、同じくタイ族のアユタヤ王朝（14～18世紀）時代の作例で、単独像の他、複数、多数の触地印仏陀坐像を円形や火頭形にぎっしりと収める構成にいくつものバラエティがあります。

I-3：陶磁器

タイではスコータイ王朝が成立する13世紀以降、盛んな陶磁生産が展開されました。その中心となったのが、首都スコータイと副都シーサッチャナーライです。製品の多くは14世紀以降、東南アジア諸国、西アジア、日本といった世界各地への輸出用に製作されました。日本では江戸時代初期、南方からの舶載されるタイ陶磁を「宋胡録」と呼び、唐物（中国陶磁）と似て非なる独特の魅力が、主に茶の湯の世界で珍重されました。「宋胡録」とは、当時タイ陶磁の輸出拠点として知られたサワンカロークという地名に由来するものです。それは、例えば有田で焼かれた製品が、輸出港の名にちなんで「伊万里」と通称されるのに似ています。

タイ陶磁の技法は中国陶磁に倣いその影響を強く受けながら、独自の発展を遂げました。自由闊達な絵付文様を特徴とする鉄絵（**18～26**）、透明感のある青緑色の発色が美しい青磁（**27～30**）、白釉と褐釉で

彩った作品（**31・32**）はその代表例です。**31**の水注はインドネシアで出土したもので、イスラム教世界で用いられる水注を象っています。そのことは、当時ムスリム商人の台頭により急速にイスラム化していたインドネシアが、自国に本格的な窯業地をもたないために、こうした器をタイに依頼していた事情を物語っています。

当館には他にサンカンペン（**35**）、カロン（**36**）、パーン（**37**）などタイ北部の古陶磁も網羅的に収蔵されています。13世紀末にタイ北部に建国されたランナータイ国下に操業されたとみられるこれらの窯址からは、鉄絵、灰釉、青磁など様々な種類の製品が出土しています。しかし相互の関係性や、中部のスコータイ、シーサッチャナーライとの影響関係については未だ詳しいことは明らかになっていません。

II カンボジア

II-1：青銅遺物

銅と錫を高温で溶かすことで生み出される合金である青銅は、強度と耐久性に優れ、インドシナ半島では各地で彫像、器物、装身具、武器などが制作されました。ことに9～15世紀にかけて半島を席卷したクメール族のアンコール王朝下では高度な青銅鑄造技術が育まれました。

アンコール王朝ではヒンドゥー教と大乘仏教が混在あるいは融合しながら、後期密教も取り入れられて独特の宗教美術が生みだされました。**38**は王朝の前期、10世紀に遡る仏教彫像の希少な遺物で、アンコール王朝時代に特有の宝冠をつけており、髻の正面に化仏を表すことで弥勒菩薩像と判明します。

40～42はアンコール寺院遺跡から少なからず出土するもので、いかにも奉獻仏（塼仏）を成形するための型とみえます。同時代にアンコール王朝の影響下にあったタイの寺院遺跡からは、これらが形式化した型が、その成果品とみられる奉獻仏とともに出土するのですが、中心地であったアンコールの遺跡からは、どういうわけか出土するのは型のみで、奉獻仏の出土は皆無とってよいほど確認されていません。日本では「印仏」の一種として、このような型を砂面などに押

し当てては消すことを繰り返す密教修法の例が知られます。11世紀以降アンコール王朝で行われる後期密教信仰において、同様の用途に用いられた可能性も考えられます。**42・43**に表されたヘーヴァジュラは、アンコール王朝で特に好まれた後期密教の尊像です。どちらの作品も、八面十六臂を特徴とするヘーヴァジュラの威容が、小さいながらも細やかに表現されています。

II-2：陶器

クメール族によるアンコール王朝は、一時はインドシナ半島のほぼ全域を席卷するまでに繁栄しました。有名なアンコール・ワット寺院やアンコール・トムの都城が造営された11～12世紀に王朝は最盛期を迎え、クメール陶器の生産も活況を呈しました。

44・45は初期クメール陶器の作例で、素朴な造形に薄く掛けられた灰釉を特徴とします。灰釉は11世紀に最も盛んとなりますが、その後は黒褐釉（**47～49・51・53～59**）の生産が主流となって、次第に数を減らしていったと考えられています。王朝の勢力拡大によって、クメール陶器の生産地は現在のタイ領域にも広がりました。施釉の種類は限られるものの、神の使いとされたゾウや鳥（**46～50**）、知恵のある動物として尊ばれたウサギ（**51・52**）など、様々な動物モチーフが目を楽しませてくれます。それらは、遺物の大多数を占める瓶や壺（**57～59**）とともに、アンコール王朝が誇る厳格にして壮麗な彫刻美を偲ばせます。

II-3：きぬのり 絹緋

カンボジアには木綿や絹による様々な技法の染織がみられますが、なかでも絹製の緋は、括り技術の精密さ、発色の美しさにおいて、アジアの緋の中でも群を抜いています。緋とは、経糸・緯糸をあらかじめ部分染めし、織って文様を表わす技法です。例えばある色を染める場合、その色に染めたい部分以外は、植物の繊維などで糸を括ることで染料がしみるのを防ぎます。赤、藍、黄色などに発色する天然染料を用い、それらの色をかけ合わせて黒や紫、緑などの色も表わします。

用いる色数によって何度も括っては染め、解いては括りという作業を根気よく繰り返します。彩り豊かで絵画的な表現力に富むカンボジア絹緋の魅力は、こうした高度な括りと染め分けの技術に裏打ちされているのです。

60・61は、仏教的モチーフによってデザインされた優品です。**60**はタイのスコータイ王朝の第5代・リタイ王が編さんしたとされる「三界経」に基づき、その宇宙観を表したもの。**61**は釈尊の前世の物語に取材したもので、いずれも上座部仏教で好まれる題材です。アンコール王朝の時代はヒンドゥー教と大乘仏教が主体でしたが、王朝が15世紀に滅亡すると、カンボジアにおける宗教信仰はアユタヤ王朝の影響を受けて上座部仏教化し、現在も国教となっています。

III ミャンマー

III-1：奉獻仏

仏教寺院に建てられる仏塔（ストゥーパ）は、仏舍利（仏陀釈尊の遺骨）を納める建物です。しかし当然ながら本物の仏舍利は求めるべくもなく、代わりに貴石や経典、あるいは高僧の遺骨などを納めるようになります。

ミャンマー（旧ビルマ）領域においては、9世紀頃まで存在したピュー族による国家、ビルマ族によるバガン王朝の勢力下（11～13世紀）において、仏教寺院遺跡から膨大な数の奉獻仏が出土します。それらは、まさに仏舍利に代わるものとして大量に制作されたとみられる塼仏で、主に仏塔内に敷き詰めるようにして納められました。制作後すぐに塔内に密閉され、その後は塔が倒壊でもしない限り人目に触れることはありません。粗目の粘土を低火度で焼いたものが殆どで、焼き物としては脆弱なのですが、タイのように念持仏として崇めたり護符のようにして携行する風習もなかったようで、遺物は一様に細部までよく当初の形を留めたものが多いことも特徴といえます。

63の6点はタイエキッター遺跡をはじめとするピュー国時代の遺跡から多く出土するタイプで、高肉に表された仏陀坐像は引き締まった姿で、写実的に表現されています。**65**の3点はバガン王朝時代の代表

的なタイプです。いずれも裏面には、ビルマ文字の元となったモン文字によって「ナム・ブダ」と手書きで刻まれており、仏塔や寺院の建立に際して仏教の永続を祈願する人々の想いが込められています。

III-2：陶器

1980年代、タイとミャンマーの国境付近に位置するメソットと呼ばれる地域の一帯で、それまで知られていた東南アジア陶磁にはない特徴的な焼き物が発見されて話題となりました。それは白地に緑の色釉で文様を施した、いわゆる白釉緑彩陶器（**71～75**）で、釉薬の成分がペルシャ陶器に特徴的な錫と鉛で、東南アジアでは類例のなかったことから、産地についての議論が展開されました。現在では、ミャンマー国内の寺院遺跡に残る装飾タイルと同じ釉薬が施されていることから、同国の領域で製作されたものと見る向きが強いようです。

III-3：漆器

ミャンマー領域では、古くより豊かな漆文化が育まれました。ピュー国の時代には既に漆が使用されていたとみられ、その後のバガン王朝時代の遺跡においては彫刻や建築の装飾に漆が使用された痕跡が確認されています。現在バガンの町は、ミャンマー漆器の生産地として知られます。

藍胎（**80**）は、竹皮材などを編んで器形をつくる技法です。材を巻き重ねて成形する塼胎（**79・81**）という技法もあります。そうした出来た器体の上に木屑を混ぜた漆や粘土などを塗り重ねて表面を整え、さらに朱や黒の漆を幾重にも重ねます。そして様々な文様を線刻し、その凹部にそれぞれの色漆を埋めて研ぎ出して仕上げます。この一連の工程は、わが国で「蒔醤（きんま）」と呼ぶ、ミャンマーとタイに最も一般的に伝わる漆芸技法です。「蒔醤」はもともとコショウ科の植物の名称ですが、その葉に、ピンロウジなどの種子を刻んだものと水を加えた石灰を包み込んで嘔む、嘔みタバコに似た嗜好品のこともいいます。東南アジアではこのための材料を入れる器によく漆器が用いられたことで、日本ではいつしかそれに施された装飾技法のことをいうようになったようです。